



このコーナーは新刊の心理学関連書籍を著者自らにご紹介いただくコーナーです。

見えない偏見の科学 心に潜む障害者への偏見を可視化する

栗田季佳

「障害」をテーマとする研究は、障害に関心のある一部の限られた領域が取り組むものだと感じられるかもしれませんが。しかし、障害者を取り巻く問題は、障害者という対象に限られた問題ではありません。障害者問題には、人間の心のあり方や、社会が抱える矛盾や葛藤がより現れやすく、私たちの社会の普遍的な問題が映し出されます。筆者は障害をテーマとする研究のおもしろさをそこに感じています。

本書は、障害者に対する私たちのまなざしを通して、差別する人

間の心の働きを見つめようとしたものです。差別の現実や研究の話だけでなく、当事者の方や隣接領域の方に執筆していただいたコラムも登場します。偏見低減や差別是正を呼びかける本というよりは、私たちが差別をしてしまう性質をもっていることを前提に、問題をどのように考えるかを問いたいと思い、本書を執筆しました。今の社会が孕む問題と、その歪みの弊害を最も受ける人たちがいること、ひいてはその問題が私たち個人に返ってくることを、考えるきっかけになれば幸いです。



著 栗田季佳
発行 京都大学学術出版会
A5判 / 170頁
定価 本体2,400円＋税
発行年月 2015年3月

くりた としか
三重大学教育学部講師。専門は社会心理学、特別支援教育。著書はほかに『APA心理学大辞典』（分担翻訳、培風館）、『教育認知心理学の展望』（分担執筆、ナカニシヤ出版）など。

ゆがんだ認知が生み出す 反社会的行動

その予防と改善の可能性

吉澤寛之

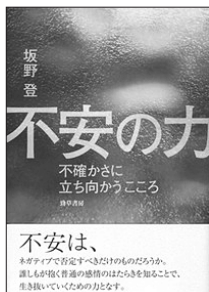
「少年の心の闇」という言葉を聞いたことのない心理学者はいないであろう。凶悪犯罪を行った少年の心理的特徴を形容する表現である。謎めいた、得体の知れない心理状態により行われた犯行であるかのようにたとえられているが、彼らの心理は本当にダークサイドなのだろうか。近年、サイコパシーを中心としたダークトライアド研究などが注目を浴び、こうした問いに答える試みはなされているものの、反社会的行動を行う者が何を考えて行動に至っているか、その心理過程を直接的に解明する専

門書は皆無に等しい。本書は、国内外の若手研究者が中心となり、現代の反社会的行動の顕著な特徴である認知のゆがみに焦点を当てて、その心理過程の解明に挑んでいる。社会・教育・発達といった心理学領域に脳科学も含めた先端的知見を紹介するだけでなく、それらを発展させた予防と改善の可能性をも射程に入れている。「血のように赤く染められたメガネを通して世界を見る傾向がある（ディルら、1997）」とも形容される彼らの「心の闇」を読者が読み解くヒントとなれば幸いです。



編著 吉澤寛之・大西彩子・G, ジニ・吉田俊和
発行 北大路書房
A5判 / 280頁
定価 本体3,000円＋税
発行年月 2015年3月

よしざわ ひろゆき
岐阜大学大学院教育学研究科准教授。専門は犯罪・非行心理学、社会心理学。著書はほかに『モラルの心理学』（分担執筆、北大路書房）、『葛藤と紛争の社会心理学』（分担執筆、北大路書房）、『学校で役立つ社会心理学』（分担執筆、ナカニシヤ出版）、『青年期発達百科事典』（分担翻訳、丸善）、『パーソナリティ心理学ハンドブック』（分担執筆、福村出版）など。



著 坂野 登
発行 勁草書房
四六判 / 272頁
定価 本体2,700円+税
発行年月 2015年5月

さかの のぼる
京都大学名誉教授。日本心理学会名誉会員。専門は教育神経心理学。著書はほかに『脳と教育：心理学的アプローチ』（編著、朝倉書店）、『ヒトはなぜ指を組むのか：脳とこころのメカニズム』（青木書店）、『脳バランスとこころの健康』（青木書店）、『二つのこころと一つの世界：心理学と脳科学の新たな視角』（新曜社）など。

不安の力 不確かさに立ち向かうところ

坂野 登

この本は、左右の大脳半球のはたらきがそれぞれ、認知的不安と身体的不安と関係するという知見に接したことから出発した、知的冒険の旅の成果である。旅を導いてくれたのはほとんど、インターネットからダウンロードできた学術的な資料だった。そこからたとえば、スピルバーガーの特性・状態不安検査の項目には二つの不安が混在し問題があること、あるいは教示によりこの二つの不安を生じさせ、また反転させることが可能なことなどを知ることができた。さらにはフロイトの不安論ある

いはアイゼンクのパーソナリティ論のなかに、この二つの不安の存在を発見したりもした。通常二つの不安は、意識されずに反転を繰り返して私たちのこころのはたらきを支えていると考えられる。適度の身体的不安が共感性、心の理論、セルフ・アウェアネスの高さと関係している理由はここにある。しかし反転の環がどこかで中断されると身体的あるいは認知的不安として止まり、ネガティブな不安感情として意識にのぼってくる。この不思議な不安の姿を、本書から読み取り感じていただきたい。



編著 鈴木聡志・大橋靖史・能智正博
発行 ミネルヴァ書房
A5判 / 252頁
定価 本体2,500円+税
発行年月 2015年4月

すずき さとし
東京農業大学教職・学術情報課程准教授。専門は教育相談、心理学史、ディスコース分析。著書はほかに『ワードマップ 会話分析・ディスコース分析』（新曜社）、『教育とカウンセリング』（共著、八千代出版）、『図で理解する生徒指導・教育相談』（分担任筆、福村出版）、『笑いと嘲り』（訳、新曜社）、『後知恵』（訳、新曜社）など。

ディスコースの心理学 質的研究の新たな可能性のために

鈴木聡志

20年以上前のことだが、卒業研究の指導をしていた学生が中学生と高校生を対象に行った不登校についてのアンケート調査に、自由記述の欄があった。筆者はその回答をざっと読み、分析する価値があると直感した。そして回答の内容をもとに10数個の質問項目を作成し、リッカート尺度で測定する調査用紙を作成してみたものの、はたしてこれでいいのか考え込んだ。この用紙を使って調査をすれば不登校についての態度の因子が見つかり、そしてその発達や性差がわかるだろう。しかし、

もとのデータにあった面白さや豊かさは失われてしまう。中学生・高校生たちが書いた回答をそのまま分析できないかとその後研究方法を模索し始め、たどりついたのがディスコース分析だった。本書は、わが国の心理学においておそらく初となるディスコース分析の入門書であり、論文集である。ディスコース分析は談話分析や言説分析とも呼ばれる質的研究法の一つであるが、これを用いた心理学の研究は日本では少ない。本書をきっかけに、この研究法の面白さを広く知ってほしい。